

私の母国チェコ出身の建築家アントニン・レーモンド（1888〜1976年）。旧帝国ホテルを設計中のフランク・ロイド・ライトを手伝ったため、19年に来日し、第2次世界大戦をはさんで半世紀近い時間を日本で過ごした。

私がレーモンドの名を知ったのは大学で日本文化と美術史を学んでいた90年代のことだ。20世紀のモダニズムに日本が与えた影響を研究しており、日本の伝統建築とモダニズムを融合した彼の業績に興味を持った。しかしチェコに資料はほとんどなく、母国では長く忘れられていた。

母国との縁が途切れた理由はいくつかある。現在のチェコ工科大学を卒業した翌年に米国に移住し、米国人になったこと。聖路加国際病院、東京女子大学礼拝堂、群馬音楽センターなど代表作が日本にあり、母国には一つもないこと。そして最も重要なのが家族を失ったことだ。戦前、レーモンドは何度もチェコ

日本を愛したチェコ建築家

◇母国で回想本刊行 忘れられた業績伝える◇ ヘレナ・チャプコヴァー



を訪問し、38年に帰国したことも分かっている。このとき、両親はすでに亡くなっていた。そして数年後、兄弟全員がホロコーストで命を絶たれる。レーモンド一家はチェコのクラドノ市に暮らすユダヤ系だったのだ。それでも60年代にはチェコの若い建築家たちがレーモンドに関心を抱き、母国での展覧会の企画が持ち上がったこともある。しかし実現しなかった。68年、旧ソ連がチェコに侵攻したためだ。来日して大学の教員になった私は、いつかレーモンドの仕事を母国に知らせたいと考えていた。そして昨年、ひよんなこととで夢がかなった。彼の故郷クラドノ市とチェコ政府が費用を負担してくれることになり、チェコ



日本の自邸でのアントニン & ノエミ・レーモンド夫妻

の出版社から日本語とチェコ語併記の書籍「日本におけるアントニン・レーモンド 1948〜1976 知人たちの回想」を刊行した。チェコ語による初の本だ。刊行には多くの方の協力を得た。17年間秘書を務めた五代美子さん、レーモンド設計事務所所働いた内藤恒方さん、北澤興一さんのインタビューを収録。北澤さんからは数多くの写真や資料もお借りした。日本におけるチェコの文化施設、チェコセンター東京も出版を後押ししてくれた。

レーモンドはなぜ日本で長いキャリアを築くことができたのだろう。インタビューから浮かびあがるのは、彼が築いた国際的ネットワークの存在だ。米国の大手設計事務所に勤務して独立、日本ではライトの下で働いたことにより、米国をはじめとする外国人コミュニティと交流したのだ。そして何より当時の日本人、とくに富裕層がモダンな住宅や別荘を求めた。日本的な感性を取り入れたレーモンドの建築が受け入れられ、クライアントも増える。戦前は主に外国人や外国企業との仕事を手掛け、戦後は日本の公共建築などへ活躍の幅を広げた。事務所には日本人の所員も増え、建築家の前川国男、吉村順三らを輩出する。母国にわずかに残され

た書簡からは、戦後のレーモンドの母国に対する複雑な思いがうかがえる。戦後のチェコ、特に旧ソ連侵攻後の母国は、もはや自分の知る祖国ではないと感じていたのではないだろうか。しかし孫娘のシャロットさんによれば、晩年チェコでの昔の出来事を思い出して笑い出すことがあったそうだ。母国との心のつながりは途絶えることはなかったのだろう。チェコ語で友人あてに手紙を書き続けたレーモンド。故郷のサポートで母国語による自分の本が出たと知ったら、大喜びするにちがいない。(立命館大学准教授)

掲載：2020年4月17日 日本経済新聞